



内閣府
Cabinet Office

令和7年度内閣府 多世代参画による地域活力プラットフォーム構築調査事業

「都市型多層ごちゃまぜプラットフォーム調査事業」

最終報告書(概要版)

認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸

2026年3月

I. 事業の背景・目的・問題意識

1. 事業の背景

- ・高齢者の生活支援、孤独・孤立化による居場所づくり、急増する外国人の受け皿づくり、若者の流出、地域団体における担い手の高齢化など、未解決の都市部における多様な地域ニーズが存在している
- ・それらニーズに対応するための地域活動人材の発掘・育成・マッチングの仕組みが不足している

2. 事業の目的

- ・神戸市東部(東灘区・灘区の人口34万人エリア)において、行政と連携し、多層プラットフォームを構築すること
- ・第1層を中間支援拠点(区PF/2カ所)、第2層を地域密着型の居場所(ミニPF/7カ所)に設定すること
- ・これらを総合的な推進体制のもとで、多様な住民との接点を生み出し、担い手の輩出と仕組みを構築すること
- ・同時に、属性や経歴にとらわれない「ごちゃませ」の価値観を地域コミュニティの中で醸成すること

3. 問題意識

- 統計上に見られる多世代の人材はどこにいて、どのような働きかけに反応してくれるのか
- 一般市民への広報はネットが有効か、アナログが有効か
- コーディネーターが果たす役割はどのようなものなのか
- コーディネーターの素質はいかに育まれるのか
- 活動拠点(場)の持つ影響とは何なのか
- 中間支援組織と地域密着団体はどのような協働スタイルが可能なのか
- 自治体や行政とボランティア登録の仕組みが相乗りできるのか
- この事業を通じて地域団体との協働が可能になる糸口が見いだせるのか

II. 事業の概要・枠組み

1. 事業の概要

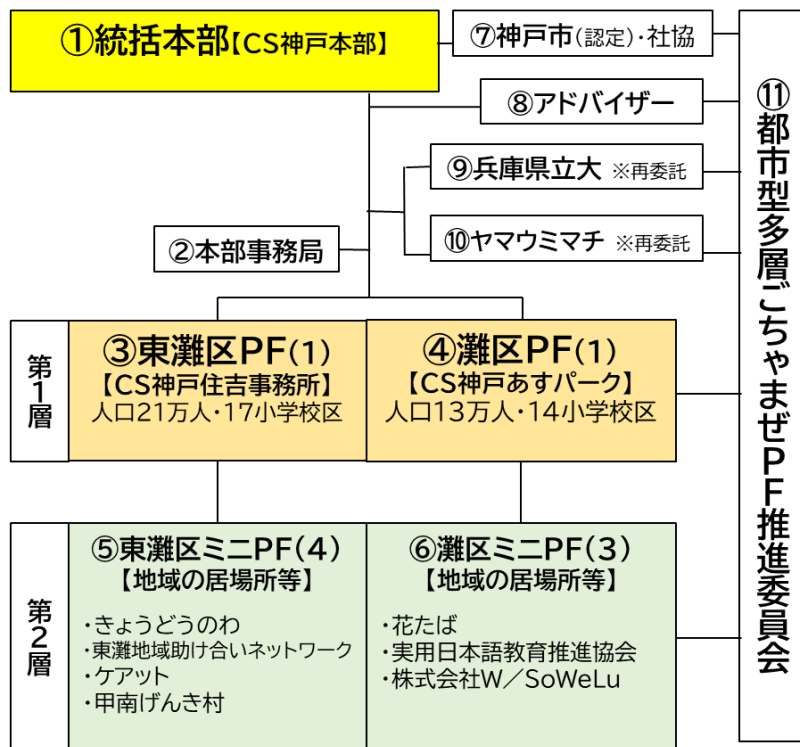
【事業名】都市型多層ごちゃまぜプラットフォーム調査事業

【実施期間】2025年4月21日～2026年3月31日

【対象地域】神戸市東部(東灘区・灘区の人口34万人エリア)

【事業費】9,100,000円(内閣府からの委託)

2. 事業の枠組み



名称	機能
①統括本部	総合企画、進捗管理、外部との窓口、各種調整
②本部事務局	事業全体の事務局業務
③東灘区PF	Vバンク構築・運用、ミニPF調整、各種セミナー実施
④灘区PF	ミニPFとの調整、セミナー実施
⑤東灘区ミニPF	ミニセミナー実施、交流促進、広報協力、登録推進
⑥灘区ミニPF	ミニセミナー実施、交流促進、広報協力、登録推進
⑦神戸市・社協	市・社協事業との調整、広報協力
⑧アドバイザー	事業全体のアドバイス
⑨兵庫県立大学	事前調査、効果測定に関する助言
⑩ヤマウミマチ	SNS等のデジタル広報の実施
⑪推進委員会	①～⑩の関係者全員での情報共有、課題対応の議論

Ⅲ. 実施事業(全体)

[実施事業および実績一覧]

事業種別	項目	実施主体	実績
1. 拠点形成	・区PFとミニPFにおける機能拡充 (情報提供・相談・交流・マッチング促進等)	区PF／ミニPF	拠点形成および拡充9か所
2. 事前調査	・ボランティアに関する意識調査 (参加動機および継続要因の調査・分析)	区PF／ミニPF	回収152通
3. セミナー	・3種のセミナーを通じた地域活動との接点づくり (サロン・フェスタ／ミニセミナー／連続セミナー)	区PF／ミニPF	実施21回 参加者257名
4. マッチング	・「Vバンク」の仕組の構築・運用 (個人登録の促進、人材募集案件の開拓・調整、マッチング までのコーディネート、立ち上げに向けた伴走支援)	区PF／ミニPF	登録297名 募集案件72件 マッチング197件 立ち上げ1団体
5. 組織間連携	・神戸市、市・区社協、大学・学校等との連携	区PF	広報ベースの連携3団体 事業ベースの連携4団体
6. 広報	・ミニPFや公共施設でのアナログ広報 ・HPやSNSを活用したデジタル広報	区PF／ミニPF ／ヤマウミマチ	広報拠点12カ所 デジタル広報170回
7. 分析調査	・マッチング成立者13名のストーリー調査 ・ミニPFへのアンケートおよびヒアリング調査	区PF	追跡調査13名 フィードバック7団体
8. 推進委員会	・推進委員会(関係者全員での情報および課題共有) ・アドバイザー会議(アドバイザー3名による事業チェック) ・事務局会議(Vバンクに関するオペレーションの調整)	区PF	事業会議29回

Ⅲ. 実施事業(詳細)

1. 拠点の形成・拡充 未活動者に対し「接点の量と質」を高めるため拠点を整備した

[東灘区]

第1層
(区PF)
2カ所

CS神戸・住吉本部
(CS神戸の自前拠点/
NPOに関する総合相談窓口事業等)



[灘区]

CS神戸・あすパーク
(CS神戸の自前拠点/
各種講座やサロンや地域活動を行
う個人や団体のインキュベ
ション事業などを実施)



認定NPO法人東灘助け合いネットワーク
(市内にある常設居場所)



NPO法人きょうどうのわ
(多機能・多世代居場所)



NPO法人実用日本語教育推進協会
(外国人に日本語を教えるサロン)



NPO法人花たば
(商店街内にある常設居場所)



労働者協同組合 甲南げんき村
(生協店舗内の常設居場所)



認定NPO法人ケアット
(高齢者・障害者制度事業や居場所)



株式会社W(Incubation Studio SoWelu(ソエル))
(イベントスペースを併設した「まちの交流拠点」)

第2層
(ミニPF)
7カ所

- [成果]・区PFが企画とマッチングを担い、ミニPFをボランティア活動への身近な入口とする多層性・役割分担が有効に機能した。
・区PF、ミニPFのいずれも常駐のコーディネーターの登録者への適切な後押しが、マッチングにつながった。
・PFコーディネーターのスキル向上やネットワーク構築につながり、地域の中でよりその存在を認識されるようになった。
- [課題]・事業広報や登録者との調整など、ミニPFが中間支援機能の一部を担うこととなり、意識合わせに時間を有した。

Ⅲ. 実施事業(詳細)

2. 事前調査

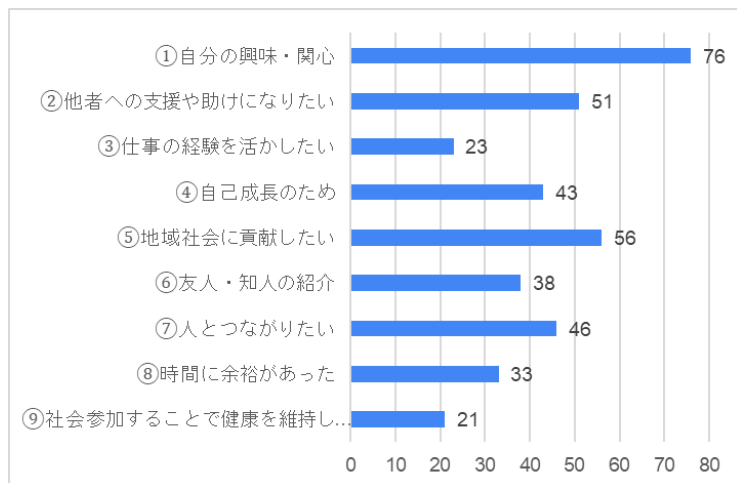
[目的] 地域活動への参加・継続の動機や要因を探り、より効果的な仕組みを構築するために実施

[対象] 区PFおよびミニPF拠点にて、既にボランティアをしている人

[期間] 2025年5月24日～6月2日(10日間)

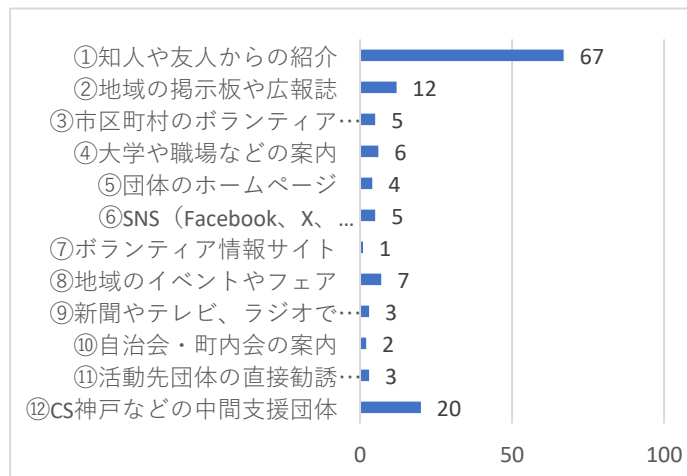
[回答] 152通 (10～80代で50代以上がボリュームゾーン/女性が約6割/自営業含む就業者が約4割)

[ボランティア活動に参加したきっかけ]



「自分の興味・関心」が最も多く、次いで「地域社会に貢献したい」、「人とつながりたい」が続いた

[現在活動している団体はどこで知ったか]



「知人や友人からの紹介」が最も多く、次いで「CS神戸などの中間支援団体」となった

[成果]・仲間づくりや自己成長など、社会貢献より活動そのものの「楽しさ」が動機付けとなっていることがわかった。

・知人・友人経由や中間支援団体から情報を得た人が多く、「誰かからの紹介」が有効であることがわかった

・結果を当事業に反映させるとともに、分析調査(後述)にも活用することで、事業設計の妥当性が得られた。

[課題]・調査対象者の年齢の偏りに関する一定の考慮が必要である。

Ⅲ. 実施事業(詳細)

3. セミナー

種別	目的・内容	タイトル例	実績
(1)サロン・フェスタ	地域活動に関するまとまった情報が得られ、お試し体験にも参加できる単発のプログラム	ボランティア紹介サロン/コベカツサロン/プロボノサロン/神戸市東部ボランティアフェスタ 等	合計21講座 参加者257名
(2)ミニセミナー	ミニPFが企画するミニPFの特性や地域性を活かしたセミナー	多文化共生セミナー/水道筋ごちゃまぜ井戸端会議/つかのまBAR/シニア元気ポイント説明会 等	
(3)連続セミナー	地域課題に対応する新規のグループ創出を目的とした連続講座(講座編4回・実践編4回)	東灘区・灘区の“いま”/事例紹介/ボランティアキャリアガイドシート/事業計画づくり(外国人との共生)	



(1) サロン・フェスタ
第1回ボランティア紹介サロン



(2) ミニセミナー
第6回RICのわ交流カフェ



(3) 連続セミナー
講座編②地域活動なかまづくりセミナー

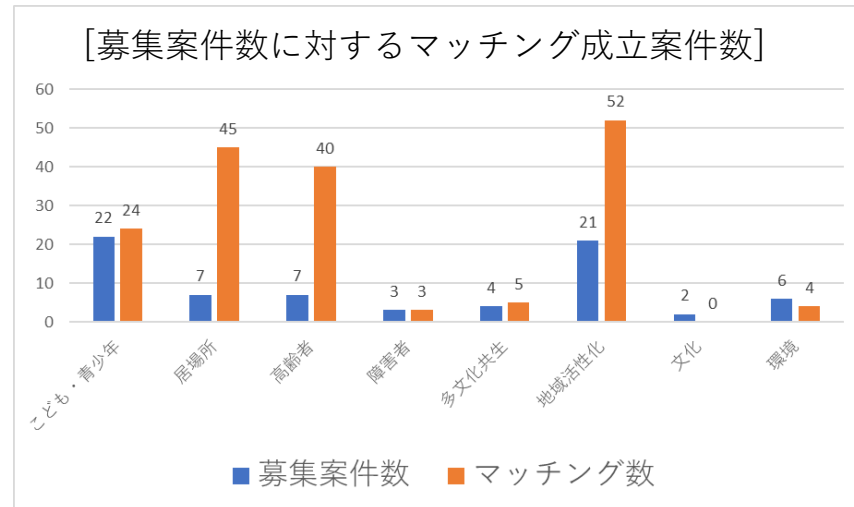
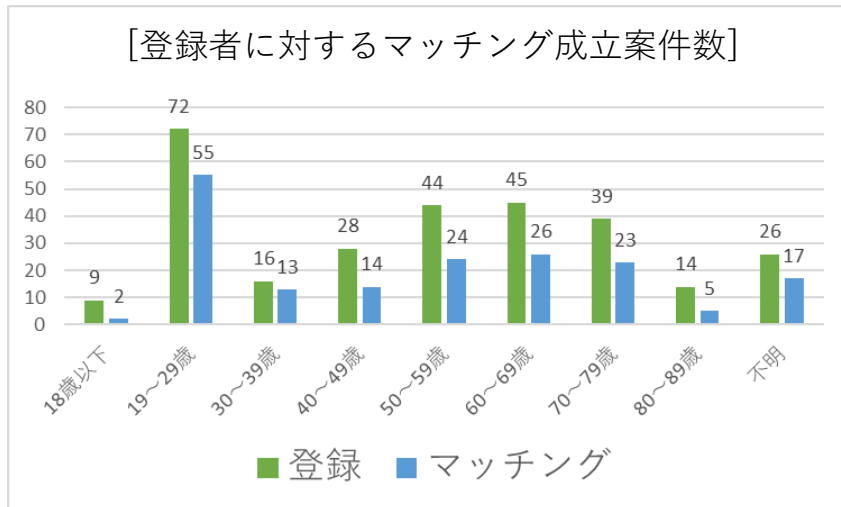
[成果]・多種多様な21講座を実施し、257名の参加を得ることができた。登録・マッチングにもつながった。
・連続セミナーの修了生により、東灘区で多文化共生を目指すグループ「世界とつながるカフェ」が立ち上がった。
[課題]・人材募集中の団体が一同にブース出展する「フェスタ」が、団体からも個人参加者からも好評だったが、今年度の実施は1回のみとなった(小規模の「サロン」を中心に展開したため)。どのような形態が有効か、今後の検討事項とした。 7

Ⅲ. 実施事業(詳細)

4. マッチング

- ・ボランティア登録とマッチングに向けた「ごちゃまぜボランティアバンク(Vバンク)」を設置・運用し、区PF・ミニPF9カ所共通で登録できるシステムとした
- ・ボランティア登録、団体募集案件、マッチング件数、立ち上げ団体数の月別推移は以下の通り

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計	目標値	達成率
ボランティア登録件数	26	36	25	56	28	15	52	38	17	293	400	73%
団体募集件数	12	14	5	11	7	6	7	2	8	72	150	48%
マッチング件数	4	29	22	29	16	12	46	32	7	197	100	197%
団体立ち上げ件数	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	5	20%



最もマッチング率が高かったのは19～29歳で、単発イベントへの参加が多かったことが要因。就業状況別では就業中の方が3割(フルタイム/パートタイム/自営業等)、未就業者3割(主婦・定年退職者等)、学生3割、不明1割程度。

具体的なマッチング案件は、子ども食堂、コベカツ、居場所サポート、高齢者の家事支援、ゴミ出しサポート、よいところ検診、地域福祉センターの事務、日本語学習支援、商店街イベント、まちの図書館、神戸経済新聞ライター、オリーブの収穫等。

Ⅲ. 実施事業(詳細)

4. マッチング(続き)

- [成果]・目標数値には届かない項目もあったが、マッチング数197件が最大の成果であった。
・属性(性別/年齢/就業状況)や関わり方(分野/有償・無償/単発・継続)の多様性があった。
・ミニPF経由のマッチング者が最も多く、区PFとミニPFの役割分担が有効に機能した。
・「世界とつながるカフェ」の立ち上げは、マッチング以外の方法による活動者創出の可能性を示した。
- [課題]・「学生×地域活性化×単発×有償」の組み合わせが最も多かった。マッチングしたことは喜ばしいことである一方で、マッチング件数の獲得を重視することにより、人間関係を構築した上での継続案件が敬遠される状況が起こり得る可能性があり、注意が必要。
・マッチングに至らなかった114名のフォローアップの仕組みが必要。



世界とつながるカフェ

5. 組織間連携

(1) 神戸市との連携

- ①神戸市が運用するボランティアマッチングサイト「ぼらくる」との双方の広報協力
- ②65歳以上の住民がボランティアをすると最大1万円が換金される「KOBEシニア元気ポイント」との連携

(2) 神戸市・区社会福祉協議会との連携

- ・灘区での「世界とつながるカフェ」の実施協力や灘区ボランティアセンター登録者への一斉広報協力など

(3) 大学・学校と連携

- ①「甲南大学・なんティア」と連携し、大学認定の証明書が発行される活動として、ミニPFでのニーズ調査を開始
- ②「住吉国際日本語学校」には、「世界とつながるカフェ」への留学生派遣等の全面的なサポートを受けた

6. 広報

- ・各PFでのちらし配架等のアナログ広報の他、Vバンク専用サイトの開設やSNS等によるデジタル広報も実施した

- [成果]・各主体の本業を乗り越え、いかに安心・安全な地域にするか共通の地域ビジョンを共有する機会となった。
・特に、甲南大学や住吉国際日本語学校とは、具体的なプロジェクトレベルでの協働ができた。
- [課題]・神戸市や社協が持つマッチングシステムとの連携は、個人情報への壁に阻まれ、仕組み上困難であった。
・当事業におけるアナログ広報とデジタル広報の有機的な領域分担については今後の検討課題とした。

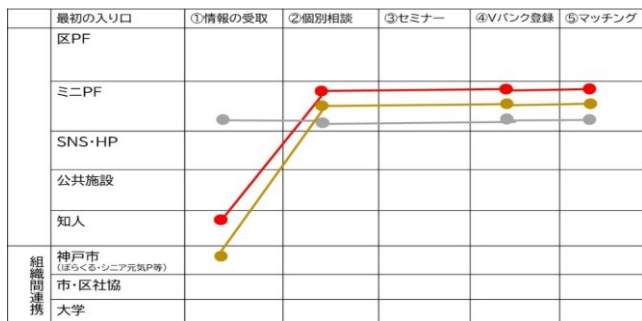
Ⅲ. 実施事業(詳細)

7. 分析調査

※完全に一致するプロセスの場合、折れ線グラフを一本に集約して表示

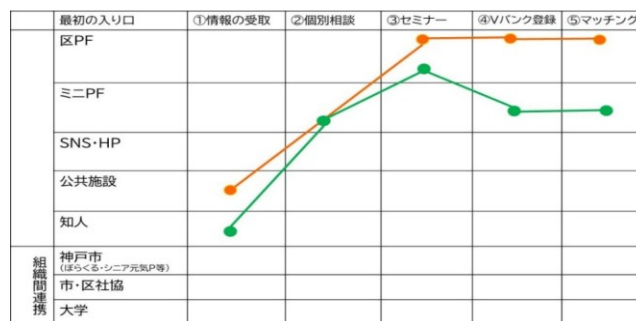
(1)13人のストーリー調査 …10代から70代まで13名のマッチングプロセスを調査し、主に4パターンに分類した

[パターンA:ミニPFコーディネーターの存在が最大の動機づけ]



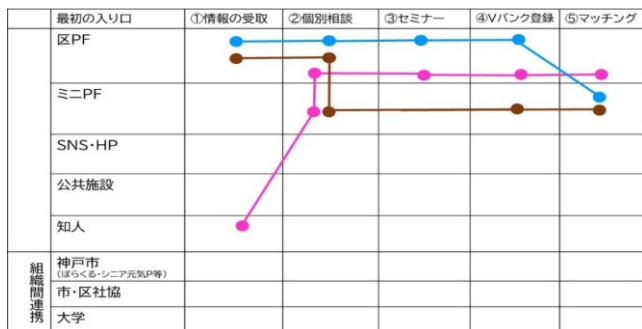
「ミニPFのコーディネーターが魅力的で月2回通っていた」
「ミニPFでの熱意に触れ、何かお手伝いがしたいと思った」

[パターンB:セミナー参加をきっかけに多様なマッチング先を選択]



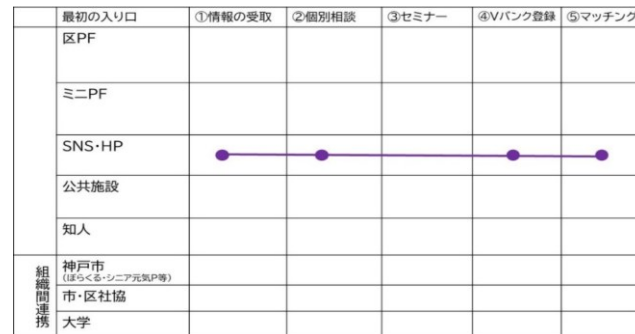
「フェスタに参加して、いろんな団体のことがわかった」
「可能な時間に参加してくれたらと言われ、気軽さに惹かれた」

[パターンC:区PFとミニPFを往来し活動先や立ち上げを選択]



「区PFのコーディネーターにミニPFを紹介してもらった」
「ミニPFから区PFの情報をもらい講座に参加、自分で立ち上げた」

[パターンD:ネット情報のみでダイレクトマッチング]



「就職活動のためボランティアがしたく、検索したらヒットした」
「全国型のサイトにはない、身近な場所の活動情報がよかった」

- [成果]・パターンA～Cが全体の99%を占め、いつでも行ける場(PF)の機能とコーディネーターの存在が動機付けになっていた。
 ・区PFとミニPFの多層性が有効に作用していることが確認できた
 ・「事前調査」の結果にも合致しており、事業設計の妥当性が証明された。
- [課題]・対象が13名と限定的であり、個別事例の分析はできたが、事業全体の動向と連動させるには不十分だった。

Ⅲ. 実施事業(詳細)

(2)ミニPFアンケート調査…ミニPF7団体に対して、当事業に対する満足度や成果・課題に関する調査を行った

●この事業に参加してよかったか(平均4.4点/5点満点、以下同)

「いろんな団体と交流できたのがよかった」「1団体ではできないことを複数の団体でできたのがよかった」

●当事業を通じて自団体の新たなボランティア導入につながったか(平均3.9点)

「この点が一番助かった」「50代のスキルあるサラリーマンと出会えた」「活動してもらうまでは至らなかった」

●拠点の機能(情報提供・相談、人材コーディネーター等)は拡充したか(平均4.1点)

「内向きではなく外向けの地域貢献も大切との認識が徐々にでてきた」「他の団体の活動案内もできるようになった」

●PFの仕組み、推進委員会の頻度や進め方は適切だったか(平均3.4点)

「粘り強く進めてこられた印象」「当初は目的がよくわからなかった」「ミニPF同士でもっとリアルな交流がしたかった」

●その他、改善点や気づいた点など

「今まで単発のボランティアは募集していなかったが、単発からの継続もありだと思えるようになった」

「ミニセミナーをできて良かった。その時につながった団体と今も連携している」

「ミニPFがそれぞれの良さを活かしながら、ひとつの事業としてご一緒できてよかった」

「行政とのネットワークはあるが、企業や大学があまりないので、この事業を通じてつながれてうれしい」

「ターゲットと目的がわからないまま事業が始まった印象」

「月次報告が大変だった。もう少しシンプルになればありがたい。事務のサポートもあれば助かる」

「スタッフにこの事業のことを説明しづらかった」

「若手社会人には“ボランティア”という言葉より、“仕事と家以外のちょっと楽しいこと”という切り口のほうが届きやすい」

[成果]・「この事業に参加してよかった」が平均4.4点となり、ミニPFの参加満足度は高かった。

・「拠点機能の拡充」も平均4.1点となり、事業目的のひとつであった「PFの機能拡充」は達成できたと言える。

[課題]・推進委員会のあり方については相対的に平均点が低く、業務オペレーションのシンプル化には改善の余地があった。

・「ボランティア」ではなく、「仕事と家以外のちょっと楽しいこと」のように、対象別の効果的な打ち出し等は今後の課題とした。

IV. アドバイザーによる考察

1. 『ボランティア 一見えてきた社会的リアリティー』 松原一郎氏(関西大学名誉教授)

- ・阪神・淡路大震災以来、民設民営の中間支援として、CS神戸がこれまで培ってきた功績の上にこのプロジェクトが結実している
- ・従来のボランティアは「市民社会」を象徴するもののひとつとしてとらえられてきた
- ・当事業の目的である「地域課題の解決に向けて幅広い世代の住民の地域活動への参画を促す」ということも市民社会を築く試みである
- ・人生100年時代では、「学習・仕事・引退」の3段階型から、「教育・仕事・副業・再学習・ボランティア」など、マルチステージ型に変化している
- ・主体的に人生設計する生き方には、有形資産のみならず、無形資産が不可欠だと言われている
- ・無形資産には、生産性資産(スキル・知識)、活力資産(家族や友人との関係や健康)、変身資産(変化への適応能力や人的ネットワーク)がある
- ・ボランティアは人生100年時代の人生戦略において、有効な無形資産の形成に大きく寄与するものである
- ・当事業は、「市民社会を担うボランティア」と「個人の生き方の可能性を拓くボランティア」の両面にインパクトを与えているのが本質と言える

2. 『ミニPFの機能・全体のエコシステム』 當間克雄氏(兵庫県立大学NPO研究連携センター)

- ・エコシステムはもともと生物学用語で「生態系」や「生存領域」を意味する言葉である
- ・CS神戸は、7つのミニPFと連携し、多様なボランティアの発掘・獲得を実現するためにエコシステムを作り上げて対応することを試みた
- ・エコシステムをつくるだけでは目的は達成できないため、エコシステムをうまく機能させるための仕掛けが必要となる
- ・その仕掛けとして「セミナー」「組織間連携」「広報」「推進委員会」が位置づけられ、197件のマッチングという成果を生み出した
- ・今回のエコシステムでは、仕掛けも含めて、デジタルではなくアナログを選択し、人と人とのリアルな関わりを重視しているのも特徴
- ・これはボランティアが「形式知(言語化された知識)」よりも「暗黙知(「いま・ここ」に依存し言語化しにくい知識)」が重要だからではないか
- ・経営学ではこのプロセスを「共同化」と呼ぶが、CS神戸はこの共同化を経験していたからこそ、リアルなエコシステムを形成したのではないか

3. 『13事例から読み解く地域活動への参加および継続の特徴』 大和三重氏(関西学院大学名誉教授)

- ・13人の事例をもとに、参加の契機、参加決定の要因、継続を支える要因を整理し、先行実施された「事前調査」との比較検討を行った
- ・参加の契機は「人生の節目での関心の芽生え」。大学、就活、転職、移住、子育ての変化、定年等の転機で地域活動との接点が生まれている
- ・参加動機は、強い社会貢献意識よりも、「何かできれば」「人と関わりたい」「楽しそう」という自分自身の関心に基づく判断が参加の端緒に
- ・参加に踏み出す決定要因は、大学の授業、図書館での掲示、知人の紹介等で、生活空間の中で可視化されていることが重要
- ・信頼できる他者の存在が大きな影響を与えていることも共通しており、制度や仕組みへの信頼より、具体的な個人への信頼が参加を後押し
- ・継続要因は、無理のない関わり方の設計(過度でない頻度、生活動線上の活動場所、見学からの開始等)、参加者の生活に支障のでない構造
- ・また、多様な世代や立場の人との出会い、同世代との安心感、子どもや高齢者との交流など、関係性そのものが最大の対価
- ・加えて、活動が一方的な奉仕ではなく、自分も満たされる場となるなど、自分に返ってくる実感が活動の継続を支えている
- ・これらの参加理由や継続の動機は、「事前調査」とも高い共通性を示しており、両調査は相互に補完し合う結果となっている

V. 成果・課題・今後に向けて (p.2の「問題意識」に対するコメント)

・事業開始当初に挙げた問題意識(p.2参照)に対応する形で、事業全体の成果・課題を以下の通りまとめた

●統計上に見られる多世代の人材はどこにいて、どのような働きかけに反応してくれるのか

●一般市民への広報はネットが有効か、アナログが有効か

➡ 約10か月という期間で197件マッチングの成果を残すことができた。アプローチ方法として、シニアはアナログ、若者はデジタルという傾向はあったが、いずれも活動参加の最後の一押しには「人」が関与していた。

●コーディネーターが果たす役割はどのようなものなのか／コーディネーターの素質はいかに育まれるのか

➡ 事前調査および分析調査の結果から、コーディネーターの重要性が明らかとなった。活動の要となるコーディネーターに必要なスキルとマインドを分析し、「ごちゃませコーディネーター」として養成できないか。

●活動拠点(場)の持つ影響とは何なのか

➡ 「拠点」が重要な役割を果たしていた。誰からも見えやすく、行きやすく、参加しやすい条件を備えた地域の拠点こそ、自前の活動の枠組みを超えて、行政や企業と連携し外部環境を整備する方向を見いだせないか。

●中間支援組織と地域密着の居場所団体はどのような協働スタイルが可能なのか

➡ 中間支援の区PFが事業統括やVバンク等のシステム管理など事業マネジメント部門を担当し、ミニPFが交流促進と登録を促す役割を担った。日常の関係を発展させたもので、今後も多層性の基本として継続したい。

●自治体や行政とボランティア登録の仕組みが相乗りできるのか

➡ システムの違いや個人情報取扱基準の違いがあり、この期間内での相互交流システムとするには壁が厚かった。

●この事業を通じて地域団体との協働が可能になる糸口が見いだせるのか

➡ 一部、地域団体からのVバンク登録はあったものの、全体的には未着手分野にとどまった。課題が山積する地域社会にあってこれからは重要課題として取り組んでいく必要性を認識しており、今後の検討課題としたい。

関係者全員が忌憚なく意見を述べ合う月1回の定期的な協議の場として、「推進委員会」が果たした役割も大きい。このような場が、地域社会の津々浦々にあり、課題の認識や具体的な取り組みの共有といった活発な議論や実践が展開されるプラットフォームの構築が求められている。住民の社会参加で、身体も心もウエルビーイングに暮らせる“わがまち”を実現していくため、当事業に関わった仲間と、さらに輪を広げ他地域へも展開できるよう奮闘を重ねていきたい。